ISSN 1344-9095

東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター

The Newsletter CNEAS

第16号

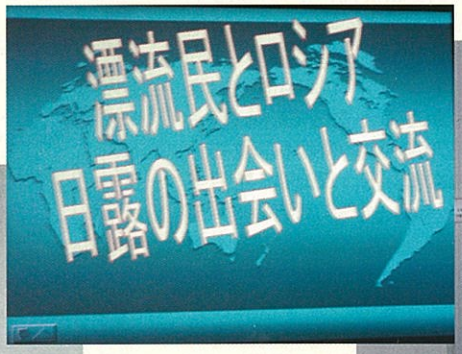
目次

東北アジア研究センター公開講演会 2002 開催 1,2
Area Report［SIGNAL］：「韓国」・「モンゴル」・「ロシア」 3
日本館便り 4
部局間協定が2件締結 4
アカデムゴロドク訪問記 5
モスクワ民族学人類学研究所における近年の研究動向 6
最近の共同研究会から 7
最近のセンター出版物より 7
センター動向 7
活動風景「ウズベキスタン調査について」 8

東北アジア研究センター公開講演会 2002 開催
「日本とロシア ―その歴史をふりかえる―」

2002年12月7日（土）14時から宮城県民会館大会議室で東北アジア研究センター公開講演会2002が開かれました。講演内容に関しては2ページに掲載しています。

「知られざる日露関係史ー対立と友好の300年ー」
アレクセイ・キリチェンコ（ロシア科学アカデミー上級研究員・東北アジア研究センター客員教授）



「漂流民とロシアー日露の出会いと交流ー」
平川 新（東北アジア研究センター教授）

東北アジア研究センター公開講演会2002
「日本とロシア ―その歴史をふりかえる―」

2002年12月7日（土曜日）14:00より、東北アジア研究センター公開講演会2002『日本とロシア ―その歴史をふりかえる―』が、宮城県民会館大会議室で開かれ、次の二つの講演が行われました。その内容について紹介します。

●講演1

「漂流民とロシア ―日露の出会いと交流―」

平川 新（東北アジア研究センター教授）

江戸時代にアリューシャンやカムチャッカに漂着した日本人の子孫が、シベリアのノボシビルスクやイルクーツクにいるかもしれない。

1697年に大坂商船がカムチャッカに漂着した記録を最古として、ロシアへの漂流事件は江戸時代だけでも13件が確認されている。伊勢の大黒屋光太夫や石巻若宮丸津太夫たちのように、遣日使節に送還されてきた例もあるが、ロシアで亡くなったり、結婚して帰化した漂流民も少なくない。そうした漂流民たちの多くは、イルクーツクなどで生活していた。

ロシア革命のあとの1925年(大正14)、敦賀の初代ソ連領事として着任したドミトリー・キセリョフ氏は、「私の祖先は日本人です」と語ったという。しかもイルクーツク生まれだ。日本人漂流民の子孫に間違いないだろう。そのキセリョフ氏が、1961年にノボシビルスクに住んでいた、という情報もある。当時、82歳だったという。ドミトリー氏存命の可能性はないが、そのご遺族はいまもノボシビルスクに住んでおられるかもしれない。

領事時代のドミトリー・キセリョフ氏

ドミトリー氏の祖先ではないかと考えられているのが、石巻若宮丸の乗組員であった善六である。1793年、アリューシャン列島に漂着して保護され、イルクーツクで洗礼を受けてピョートル・キセリョフと名乗り、ロシアに帰化した。日本語学校の教師をしていたが、国後島を襲撃して日本に捕らえられたロシアの海軍士官ゴロウニン釈放交渉のために、1813年に通訳として来日している。そのときの交渉団を描いた絵があるが、ひときわ小柄な人物こそが善六ではないかと考えられている。

アリューシャンに流されてロシア人となった石巻の善六と、初代領事として来日したドミトリー・キセリョフ。日露交流史は、こうした人びとのレベルでこそ語られる必要がある。ドミトリー氏のご遺族を見つけられると、いいのだが。

（平川 新）

●講演2

「知られざる日露関係史 ―対立と友好の300年―」

アレクセイ・キリチェンコ

（ロシア科学アカデミー東洋学研究所上級研究員・東北アジア研究センター客員教授）

キリチェンコ氏はピョートル大帝の時代にあたる約300年前の日本人とロシア人の出会いから、20世紀の悲劇的な両国関係に至る歴史を主にロシア側の視点から概観した。ロシアが東方に領土や植民地を拡大し、ことに露米会社の毛皮事業が北太平洋で繰り広げられる中で、ロシアは日本との関係構築に大きな関心を示し18世紀末のラクスマン、19世紀初頭のレザーノフの使節団を立て続けに派遣したが、両使節とも失敗に終わった。レザーノフ使節失敗の直後に両国関係に汚点を残したのが、フヴォストフ、ダヴィドフによる北海道近辺の島々への襲撃であった。存在は疑われていたのだが、この海賊的行為の内容を詳細に物語るロシア側史料をキリチェンコ氏は発掘、発表（「海賊船ユノナ号とアヴォシ号―ロシア側当事者の行動から見る樺太・択捉島襲撃事件」『東北アジア研究』第6号）した。この問題に関してはロシア側史料を利用したさらなる研究発展が求められる。

最後尾の小柄な人物が善六
（函館市立図書館蔵「北夷談」より）

日本開国後の日露関係は、日清戦争後にロシアが主導した三国干渉により悪化し日露戦争へと突入していく。日露戦争後の日露関係は、いくつかの協定が結ばれむしろ良好であった。この時期の両国関係についてキリチェンコ氏がロシアではほとんど知られていない事実として挙げているのが、第一次世界大戦に際して日露戦争に参加した日本の予備役兵の間でロシアを応援する運動が盛り上がったこと、1916年の日露協定締結である。ロシア革命でこの蜜月関係にも終止符が打たれ、革命の混乱に乗じた日本によるシベリア干渉軍が撤退するとロシアにはソ連という新たな国家が出現することになった。1920年代から30年代にかけての日本によるアグレッシブな大陸政策の根拠としてロシアでも引用されることの多いいわゆる「田中メモランダム」の信憑性についてもキリチェンコ氏は疑義を呈する。1930年代の諸問題についても秘密解除を解かれていない文書が数多いとのことだが「田中メモランダム」が偽物であるとの史料的な証拠とともに氏にはさらなる史料発掘を期待したい。

日ソ中立条約についてキリチェンコ氏は、ソ連側の一方的破棄が無効であること、条約のおかげでソ連は対独戦に専念できたことをロシアの歴史家は直視すべきであると主張する。テヘラン会談後ではなく、すでにスターリングラード決戦でドイツ軍が大敗北を喫した直後からスターリンは対日戦の準備を始めたとも氏は述べている。

対日戦はソ連の歴史家が主張するごとく精強な関東軍が相手ではなく、抵抗がほとんどみられない中行われ、ソ連はポツダム宣言を省みず武装解除された日本軍兵士をソ連に連行し強制労働に従事させた。抑留中に死亡した兵士の数など不明な点も多く、さらなる研究が望まれる（センターではキリチェンコ氏が探索した抑留中の日本人死亡者名簿の刊行を予定している）。

（寺山恭輔）

AREA REPORT SIGNAL

韓国から　韓国の見る「松井ヤンキースへ」

今回はスポーツを話題に採りあげてみよう。諸方面における韓国のこれまでの発展は、競争相手として常に意識してきた日本の存在なしには語れない。その最たる分野がスポーツである。日韓戦最初の公式ゲームはおそらく1954年3月7日のサッカーワールドカップ第13地区予選であったろう。当時、反日の旗手李承晩大統領は、いくらスポーツとはいえ日本人に韓国の土を踏ませるわけにはいかないと、自国での開催を拒否。また、競技にも応じようとしなかった。結局ホーム＆アウェイの両試合いずれも会場は東京。韓国チームの出場自体が危ぶまれた中、負けたら帰国は出来ないという覚悟のもと、大統領を説き伏せた金容植監督（兼コーチ）と選手たち。大統領はじめ母国社会によって退路は断たれ、勝利するしか‘生きる道’がないという状況に追い込まれての戦いであった。事実、神宮競技場のコンディションもさることながら、ゲームのフィルムを見ても‘壮絶’としか言いようがない。

そして現代、今度は野球である。松井秀喜前読売巨人軍選手がニューヨークヤンキース入団契約を済ませ、日本では松井選手のニューヨーク生活やら、練習風景やら、また米国での活躍予想やらでかまびすしい。ところが、韓国でもこの人のヤンキース入りは注目されている。しかし日本でのそれとは全く異質で、やはり強い競争意識の眼差しで見つめられつづけている。

日本であまり報道されていないようであるが、同選手とヤンキースとの契約内容に、11月のアテネ五輪アジア予選に同選手の出場を認める条項があるという。同選手の実力は既に韓国でも十分知られており、敵陣に入るとなれば韓国チームにとってそれこそ恐ろしい相手である。オリンピック野球競技でなんとしてもメダルを狙う韓国としては、まず日本チームに勝たなくてはならない。松井対策は、当然‘警戒すべき緊急案件’となるわけで、韓国の関係者たちは神経を尖らせている。

（成澤　勝）

モンゴルから　「一村一品」運動

民主化後のモンゴル国では、政府・民間各レベルで日本との交流が深まっている。日本はモンゴルへの最大の援助国であり、モンゴルというと援助関連のニュースが多い。このような中でユニークなのが、モンゴルでの「一村一品」運動である。「一村一品」運動は、大分県平松守彦知事が展開している地方経済の振興策として有名であるが、1999～2001年のゾドの被害に苦しむモンゴル国政府とバヤンホンゴル県がこの運動に関心を示した。大分では1986年以来大分モンゴル親善協会を中心として同国との交流を進めてきたが、とくにバヤンホンゴル県との交流は活発で、1999年1月にバヤルサイハン同県知事（当時）が大分を訪問、技術研修生の派遣も始まった。2002年8月エンフトブシン政府官房長官の招聘を受けて、平松知事が大分県国際交流センター及び親善協会の代表とともにモンゴル国を訪問、同国のバガバンディ大統領やトゥムルオチル国家大会議議長、チョイジルスレン・バヤンホンゴル県現知事と会見し、「一村一品」運動のノウハウの交換や産業・文化交流に関する「友好交流と協力に関する覚書」に調印した。同時に平松知事にバヤンホンゴル県名誉県民章が授与されている。12月14日には大分県国際交流センターと親善協会代表も参加して、バヤンホンゴル県で物産展が開催された。県民達が持ち寄った作品は一千点365品目にも及び、大分での技術研修生が栽培したキュウリや、民族衣装、焼酎など30品目が指定産品に選ばれた。大分の企業の中にはモンゴルとのビジネスチャンスを探る動きも出ているという。また本年2月には、バヤンホンゴル県県会議長と企業家の大分訪問が予定されている。大分県のこの事例は、雪害の後遺症から立ち直ろうとするモンゴル側の自助努力と、大分が積み重ねてきた草の根レベルの交流の蓄積が効果的に結びついたものといえ、同国に対する援助・交流のモデルケースとして今後の展開が期待される。

（岡　洋樹）

ロシアから　『千と千尋の神隠し』がロシアに上陸

ロシアの週間経済誌『エクスペルト』(2002年12月23日号)は『千と千尋の神隠し』の映画評を掲載した。この映画のビデオが昨年12月にロシアでレンタル開始となったからである。ロシア語のタイトルは『神隠しに遭った千尋』(Tikhiro unesennaia dukhami)となっている。『千と千尋の神隠し』は2001年夏に日本で公開され、日本映画としては過去最高の興行収入を記録した。その後、この映画は2002年初めにベルリン映画祭でグランプリ賞を獲得した。また同年秋には全米で公開され、まずまずのヒットを記録した。2003年3月におこなわれる米国アカデミー賞の外国映画部門で、この映画が受賞しても不思議ではない。

残念ながら、『千と千尋の神隠し』がロシアで一般公開されることはなかったが、ビデオで鑑賞できるようになったのは喜ばしい。現在、日本のアニメーションは世界で人気があるが、ロシアも例外ではなく、「美少女戦士セーラームーン」や「ポケットモンスター」は子供達の間で大ヒットした。ただ、宮崎駿の作品はロシアではあまり知られていないように思われる。そこで映画評ではロシアの読者に分かるように「日本の観客にとって宮崎駿は黒澤明監督に匹敵する巨匠」であると論じている。ロシア人の間では今でも黒澤明の作品を評価する人々は多いので、この表現は宮崎駿を褒め称えていることになる。『千と千尋の神隠し』のビデオ・レンタルを機に、彼の作品を通じて日本に親しみを持つ人々が増えることを願っている。

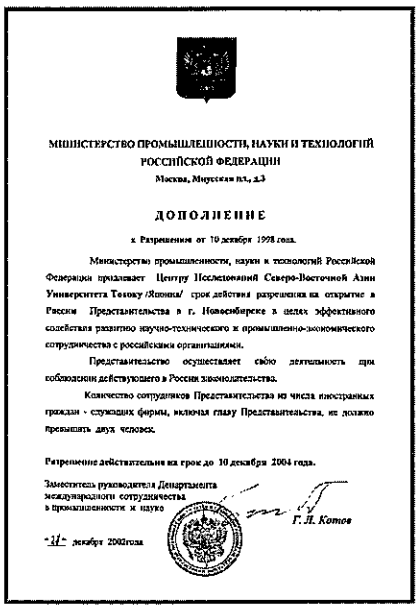
（塩谷昌史）

日本館便り
nihonkan-dayori

東北アジア研究センター連絡事務所（通称：日本館）の開所式が行われたのは1998年の5月。早いもので今年の5月には開所5周年となるが、ロシア連邦政府から正式な活動許可書が交付されたのは同年の12月であった。この許可書の有効期限は2年間であったため2002年には2度目の更新手続きが行われ、年末にはロシア連邦科学産業省国際協力課（モスクワ市）において日本館の活動更新に関する許可書が交付された。

日本館は科学産業省国際協力課にあるいくつかの部署のうち、学術および産業分野における国際協力掛・外国企業担当の管轄になっている。この部署の責任者であるA.サンブチャン氏によると、彼らもロシアの技術を海外企業へ移転させるため様々な活動に力を注いでいるので日本館のシベリアにおける活動には大変な興味と期待を持っているとのことだった。シベリアの豊富な資源と技術を産業へ結びつけることの重要さを強調した上で日本館の産学連携に貢献しようとする姿勢が評価されたが、今後ロシアと日本の技術的交流を一層深めていくためには見本市の開催が有効であること、それぞれの国が必要としている技術をはっきりと相手に伝えること、というアドバイスを受けた。ロシアで重宝されている技術が日本で必要だとは限らない、その逆も然り。必要のない技術はいくら売り込んでも見向きもされない。しかし例え金銭的援助がなくても魅力的な内容であればロシアの企業も資金繰りを何とかしてでも積極的に参加するものだ。莫大な資金を投じて開催したにも関わらず、それほど成果が得られなかった見本市などの失敗から彼らはそういったことを学んだらしい。これは一見当たり前なことであるがなかなか難しいことでもある。自信があればあるほど自分で“良い”と思っているものが他人には“それ程必要とされないもの”などとは認めたくないし考えられないことだからだ。

見本市の開催の心得としてもう1つ重要なのは、必ずその分野の専門家を集めること。興味を持った技術に関して質問をしようとしてもブースには若いコンパニオンや理解の浅い人が座っているだけというのでは話にならない。これも当たり前のことだが注意するべきことである。


МИНИСТЕРСТВО ПРОМЫШЛЕННОСТИ, НАУКИ И ТЕХНОЛОГИЙ
РОССИЙСКОЙ ФЕДЕРАЦИИ
Москва, Миусская пл., д.3

ДОПОЛНЕНИЕ

к Разрешению от 10 декабря 1998 года.

Министерство промышленности, науки и технологий Российской Федерации предлагает Центру Исследований Северо-Восточной Азии Университета Тохоку /Япония/ срок действия разрешения на открытие в России Представительства в г. Новосибирске в целях эффективного содействия развитию научно-технического и промышленно-экономического сотрудничества с российскими организациями.

Представительство осуществляет свою деятельность при соблюдении действующего в России законодательства.

Количество сотрудников Представительства из числа иностранных граждан - служащих фирмы, включая главу Представительства, не должно превышать двух человек.

Разрешение действительно на срок до 10 декабря 2004 года.

Заместитель руководителя Департамента
международного сотрудничества
в промышленности и науке
Г.Л. Котов

«11» декабря 2002года.

交付された許可書

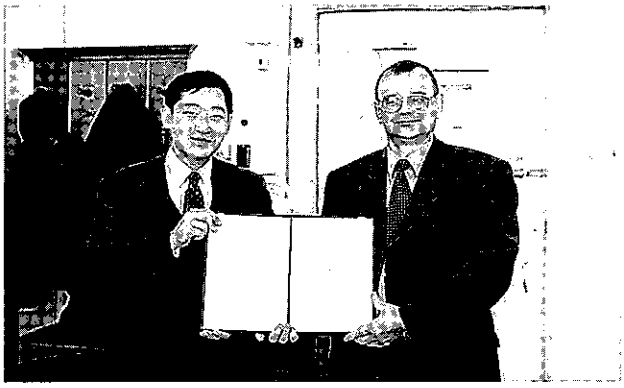
今回の訪問では日本館の活動がかなり注目されているということを改めて認識させられた。“今まで行われてきた学術的協力活動の他、今後は産学連帯のコンサルタント的な役割に力を入れシベリアおよびロシアの産業復興に協力して欲しい。ゆくゆくは活動地域をシベリアに限定せずヨーロッパロシアでも協力体制が築けるようになっていって欲しい。”

期待が大きければ大きいほど要求される成果も大きくなる。現在と同じペースの活動では次回の更新時に彼らの満足は得られないだろう。この春5周年を迎える日本館。今後はシベリアから遠く離れたモスクワからでも見えるような積極的な活動で多くの業績を挙げることが期待されている。

（徳田由佳子）

部局間協定が2件締結

●ハンテマンスク・ユゴラ情報技術研究所と部局間学術交流協定


日本館で調印に立ち会った塩谷駐在員（左）とイエローヒン所長

平成14年10月1日　ノボシビルスクの日本館で本センター山田勝芳センター長（代理：工藤純一教授）とハンテマンスク・ユゴラ情報技術研究所ゲナディ イエローヒン所長との間で部局間学術交流協定を締結した。イエローヒン所長はロシア科学アカデミー・シベリア支部の教授も兼ねており、平成12年には本センター客員教授として4ヶ月間滞在した。専門は衛星リモートセンシングで、本センターとは衛星画像を利用したシベリアの環境解析について共同研究を行っている。

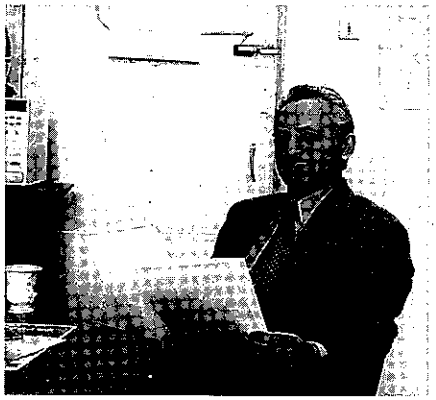
同氏が本センター滞在中には、ハンテマンシスク州の副知事、情報部長らが本学を訪問し、本センターとの学術交流を強く要請していた。今回、このような経緯から本センターと同研究所は、今後ロシアの人工衛星を利用したシベリアの環境解析を発展させるために部局間学術交流協定を締結した次第である。同研究所と既にシベリアの環境モニタリングシステムの構築について具体的な計画が進行中であり、今回の学術交流協定の締結により本センターはロシアの最新衛星を利用した画像処理などの共同研究を計画している。

●クラスノヤルスク・スカチョフ森林研究所と部局間学術交流協定

同じく平成14年10月1日　クラスノヤルスク・スカチョフ森林研究所所で本センター山田勝芳センター長（代理：工藤純一教授）と同研究所バガノフ所長との間で部局間学術交流協定を締結した。

スカチョフ森林研究所には、1994年9月の第4次ロシア科学アカデミー・シベリア支部訪問団の一員として本センター工藤純一教授（当時、大型計算機センター助手）が訪問し、F.I.プレシコフ副所長と会見し、シベリアの森林火災の検出に関して衛星画像利用した研究開発を共同で行うことについて論議したのが最初である。その後、工藤教授は毎年同研究所を訪問しノア画像からの火災検出方法を開発した。一方、プレシコフ副所長も1996年8月の本センター創設祝賀会に参加し、日ロ相互理解を深め、シベリアの環境問題に関し、エニセイ川下流にあるノリリスク鉱山都市周辺の森林環境の実態調査について共同研究を計画している。このような経緯から同研究所と部局間学術交流協定を締結した次第である。

しかし、プレシコフ副所長は昨年8月に不慮の事故に遭った。心からご冥福をお祈りすると共に、同氏の遺志を継いで共同研究を発展させたい。



プレシコフ副所長
（2002年4月、日本館にて）

（工藤純一）

アカデムゴロドク訪問記

9月23日午後5時、雨のモスクワに到着。

ノボシビルスク行きの飛行機は午後10時30分発、その間ロビーで休憩。

外に出ると息が白く吐き出される。寒い。

こうしてここから今回のロシア出張が始まったのです。

ノボシビルスクでは3日間の滞在期間中に、ロシア科学アカデミー・シベリア支部内に設置している日本館視察、同アカデミー無機化学研究所クズネツォフ所長訪問、地質学研究所鉱物博物館見学、ノボシビルスク大学ディカンスキー学長訪問及び同大学内見学、ノボシビルスク市内の見学を兼ねた北海道シベリアセンター訪問とかなりきつい日程でしたが、モスクワ到着時の寒い天候とはうって変わって、暖かく大変過ごしやすい秋の日差しに助けられ、無事に過ごすことができました。

ロシア科学アカデミー・シベリア支部やノボシビルスク大学が点在する一帯は、アカデムゴロドクと呼ばれ、筑波学園都市のモデルになったそうです。アカデムゴロドクは自然の白樺林の中にあり、黄色に色づいた葉がとても綺麗で、まるでアカデムゴロドク全体が黄色で覆い尽くされているといった感じです。ノボシビルスク大学のディカンスキー学長が話していたのですが、アカデムゴロドクを造ろうと候補地を探していた方は、この地を秋に訪問して、あまりにも綺麗だったので一目で決めたそうです。まさに「ザラターヤ・ダリーナ（黄金の谷）」と呼ばれるにふさわしい光景です。彼がこの地を冬に訪問したなら、アカデムゴロドクは別の地になっていただろうというオチまで披露してくれました。ちなみに私たちが宿泊したホテルも「ザラターヤ・ダリーナ・ホテル」という名前です。

無機化学研究所の一室を借りて日本館が設置されています（この一室が日本館の全てであることは後で分かった事である）。この日本館からVSATを利用して、東北アジア研究センターとテレビ会議を行い、それぞれの連絡事項を確認した後、日本を出発するときはマジック2だったジャイアンツが、まだ優勝していないことを教えてもらいましたが、本音は帰国してから優勝してほしいと思っていたので、多少の喜びを感じていました。テレビ会議というものを最初はいっこく堂の時間差腹話術をイメージしていたのですが、5～6秒間隔の静止画だったため、生で時間差会話を体験することはできませんでした。

ノボシビルスクでの楽しく、かつ、忙しく過ごした日々を後にモスクワに移動し、夜には本場のバレーを鑑賞するなど、ノボシビルスクとはまた違った楽しみがありました。翌日モスクワ国立大学を訪問したのですが、なぜかモスクワは雨で足元を濡らしながらの、地下鉄やバスなどの交通手段も経験することができました。地下鉄の回数券は思い出にとってあります。

モスクワでの予定も無事終了し、余裕を持って空港に向かったのですが、途中事故による大渋滞に巻き込まれ、危うく出発時間に間に合わないという状況に陥り、タクシーの運転手さんも慌てたのか、反対車線を走行するという無謀な行為にでてくれたおかげで、危機一髪で間に合ったのです。運転手さんに感謝します。

最後に、東北アジア研究センターとロシア科学アカデミー・シベリア支部とのこれまでの関係維持への並々ならぬ努力が随所に伺える印象を強く感じました。

また、今回の出張でお世話になった、日本館の塩谷先生、無機研のマリーナさん、その他対応していただいた方々に深く感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

今回の出張メンバーは佐藤正義、遠藤弘、小野信夫、畠山一典、藤原潤子、徳田由佳子以上6名でした。

（佐藤正義）

ザラターヤ・ダリーナでの記念撮影

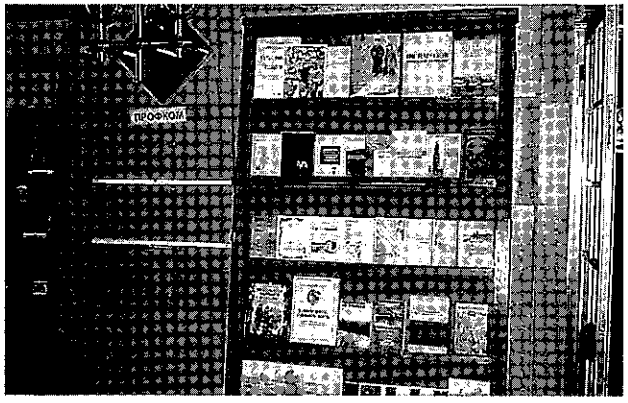
モスクワ民族学人類学研究所における近年の研究動向

民族学人類学研究所のロビー

「ミクルホ＝マクライ民族学人類学研究所」は、ロシアにおける民族学・文化人類学の研究の中心の一つである。この研究所は、多数の研究所が入居しているロシア科学アカデミー本部の建物の中の18～19階に設置されている。モスクワのほぼ中心部、モスクワ川畔に位置するこの建物の窓からは、スターリン建築様式で有名なモスクワ大学をはじめとして、モスクワの町並みが展望できる。

同研究所は、ロシアにおける最も古い人文社会科学分野の研究施設の一つである。サンクト・ペテルブルグにあるロシア人類学民族学博物館（KUNSTKAMMER, 1704年創設）の後援のもとに1933年に設立され、それ以来、ソ連及びロシアの人類学研究を牽引する役割を担いながら、今日に至っている。現在の研究所の構成は、3つの研究センターと、主として地域別の8つの研究科（otdel）とテーマ別の研究部門（sector）6つ及び研究班（gruppa）4つ、さらに学術文書館などを含むサービス・事務部門が5つある。民族学や文化人類学、形質人類学を中心に歴史学・社会学などを加えた、おおよそ180人の専門家を擁している。さらに博士課程の大学院教育も行っており、文字通りロシアの人類学研究における研究・教育の最大の拠点である。また現所長のV.ティシコフ氏を始めとして、V.シュニレルマン氏やS.ヴァインシュテンイン氏、S.アルチューノフ氏など世界的に著名な中央アジア・カフカス・シベリアを専門とする人類学者を多数抱えており、国際共同研究やシンポジウムなども活発に行われている。

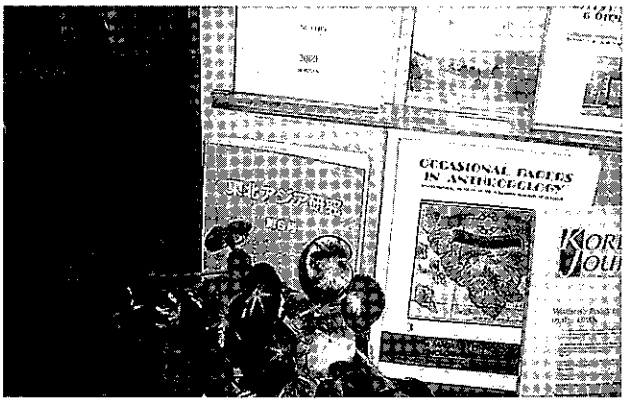
ソ連時代の同研究所は、主として社会主義革命以前の諸民族の伝統的文化の復元研究といった歴史的研究が盛んであったが、1992年以降、むしろ民族間関係や民族紛争など今日的状況に焦点を当てた研究が中心となっている。V.ティシコフ所長が代表を兼任する同研究所内部の「紛争の研究と調停に関するセンター」はとりわけそうした研究課題を掲げて1995年に設置された。その成果は『民族学モニタリング及び紛争に対する早期警告ネット報告 Biulleten' seti etnologicheskogo monitoringa i rannego preduprezhdeniia konfliktov』としてシリーズ化されている。また民族学人類学研究自体の出版物としても、『応用と緊急を要する民族学研究 Issledovaniia po prikladnoj i neotlozhnoj etnologii』がワーキングペーパーとして出版されている。前者については2002年11月時点で44号、後者については2002年5月の時点で150号を超え、活発な研究出版活動を呈している。



研究所員の研究出版物展示コーナー

それ以外にも、同研究所はさまざまな研究成果がある。ロシアの民族学・文化人類学において最も権威ある学術雑誌『民族学評論』（旧称：ソビエト民族学）の他、年報として『人種と民族』、『人類学報告』などソ連時代から継続する学術雑誌の発行を担っている。

さらに1997年以降、同研究所が中心となって『民族と文化』シリーズを発刊し始めている。これは一冊が500頁を超える大著の論文集であり、現在のロシア及びCIS諸国のすべての諸民族を対象として、民族起源・民族史・精神及び物質文化・伝統的社会組織・文化規範・現在の状況などを中心に編纂記述されているものである。現在までに『ロシア人』『ベラルーシー人』『ウクライナ人』『沿ボルガ及び沿ウラル地方の諸民族』『タタール人』が出版されており、現在印刷・編集中なのは『ダゲスタンの諸民族』『沿バルトーフィン系諸民族』『ブリヤート人』である。2002年11～12月にかけて私はモスクワに滞在し、この研究所で文献収集活動を行ったが、その際、この『民族と文化』シリーズの編集に関わる研究者と話す機会があった。すると、この出版シリーズは1950年代にソ連民族学で編集された『世界の諸民族』シリーズに匹敵する仕事であり、ソ連崩壊後独立した各共和国の研究所との協力して進められているということだった。



研究所図書室の新刊雑誌コーナーに配下されていた『東北アジア研究』6号。ただし2週間後には別の雑誌に代わった。

なお、同研究所はモスクワの地下鉄のレーニンスキー・プロスペクト駅から徒歩15分ほどにある。外国人の場合、研究所に事前に連絡をし、通行許可証を入手しないと（研究所がある）科学アカデミー本部の建物自体に入れないので注意する必要がある。なお、研究所の詳細な内容・連絡先については下記のURLを参照のこと。

http://www.iea.ras.ru/

（高倉浩樹）

●最近の共同研究会から

◆ 2002年10月31日14:30より、共同研究**「北アジアの環境・文化・歴史に関する総合的研究」第６回研究会**がセンター会議室で開催された。報告は以下の通りです。

・風間聡氏（東北大学大学院工学研究科助教授）
　「リモートセンシングによる積雪水量推定と環境への応用」
・Damdinsuren Amarsaikhan氏（モンゴル科学アカデミー・情報リモートセンシング研究所研究員）
　「A Conceptual Framework for Development of a Cadastral Information System Linked to an Environmental Information System in Mongolia.」
・N. V. Tsyrempilov氏（ロシア科学アカデミー・シベリア支部ブリヤート・モンゴル学仏教学チベット学研究所研究員）
　「Four "Living Buddhas" of Amdo and Their Role in the Qing Policy toward Mongolia and Tibet」

（岡　洋樹）

◆2002年12月16日（月）15:00より、共同研究**「図們江沿流居民生活誌の通時的共時的研究」第二回研究集会**が、東北アジア研究センターセミナー室において開かれ、次の報告が行われた。

・成澤　勝　（東北大学東北アジア研究センター教授）
　「図們江沿流満族集落と伝承説話」

報告する成澤教授

概要は次の通りである：2002年度の臨地研究で収集した中から、図們江下流左岸の満族集落「温特赫布」の郎氏一門に伝わる氏族発祥説話群を整理し、そこにおける［鷹］トーテムを検出しながら、満族ひいてはツングース族の鷹伝承上での位相を考察した。なかでも、再生を遂げた鷹と同格で登場する虎の‘遮光再生不能’モチーフが示す、朝鮮伝承との脈絡に注目し、引き続き検証されていかなければならない課題として提示した。

（上野稔弘）

最近のセンター出版物より

岡　洋樹・高倉浩樹編『東北アジア地域論の可能性　歴史学・言語学・人類学・政治経済学からの視座』東北アジア研究シリーズ４

本書は、2002年3月に開催されたシンポジウム「東北アジア地域論の可能性」における報告者と討論者の報告・発言内容を掲載したプロシーディングである。当日の和田春樹氏による講演、岡洋樹・上野稔弘・塩谷昌史・高倉浩樹各氏（以上報告者）による報告論文、栗林均・瀬川昌久・岡洋樹・入間田宣夫各氏（以上討論者）の発言内容、全体討論の要旨及び高倉浩樹氏による総括文が掲載されている。各報告の内容については、本ニューズレター第13号8ページを参照されたい。

（岡　洋樹）

センター動向

■ 寄附研究部門

平成13年1月1日より次の寄附研究部門が設置されました。

【環境技術移転（NKK）寄附研究部門】

● 渡邊　之（ワタナベ、イタル）教授：環境技術（平成13年1月着任）
● 甦叶（スエー）助手：環境政策（平成13年4月着任）

■ 現在の客員研究者

本年1月～3月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

＜客員教授＞

【国内から】

● 和田春樹（ワダ、ハルキ）教授：東京大学名誉教授・ロシア国立人文大学名誉博士、開発と社会変容の研究
● 江夏由樹（エナツ、ヨシキ）教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論
● 田村正行（タムラ、マサユキ）教授：国立環境研究所上席研究官、ノアデータを利用したシベリアの環境解析

【海外から】

● KIRITCHENKO, Aleksei Alekseevich（キリチェンコ、アレクセイ・アレクセーヴィチ）教授：ロシア、ロシア科学アカデミー・東洋学研究所南太平洋研究部門上級研究員、日露・日ソ関係に関する歴史的研究
● BELOSLUDOV, Vladimir（ベロスルドフ、ウラヂーミル）教授：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部無機化学研究所教授、VSATシステムを利用したクラスレート構造を有する結晶のシミュレーションモデルの開発
● 王満特嘎（ワン・マンドガ）教授：中国、中央民族大学教授、清代モンゴル文歴史文献の文学的性格に関する研究
● BOERNER, Wolfgang-Martin（ボーナー、ウォルフガング・マルチン）教授：アメリカ、イリノイ大学教授、ポーラメトリックSARによる東北アジア環境計測評価に関する研究

＜客員研究員＞

● 呼日勒巴特爾（フレルバートル）研究員：中国、日本学術振興会外国人特別研究員、モンゴル語音韻史の研究
● 方　広有（ファン・グアンヨウ）研究員：中国、中国伝播伝搬研究所教授、高精度地中レーダの開発と人道的地雷検知への応用に関する研究
● AMARSAIKHAN（アマルサイハン）研究員：モンゴル、モンゴル科学アカデミー上級研究員、合成開口レーダと地中レーダの組み合わせによるモンゴル環境計測

（柳田賢二）

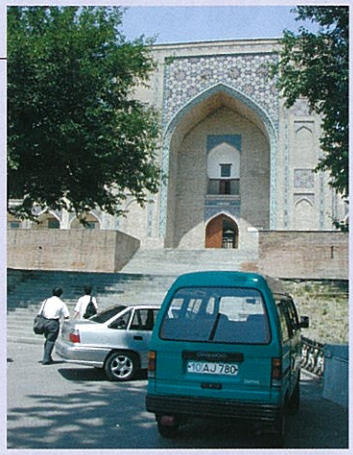
活動風景

ウズベキスタン調査について

科学研究費補助金（基盤研究(C)）「旧ソ連高麗人の民族文化の継承と変遷に関する研究—言語・伝承説話・墓制を中心として—」を基盤とするセンター共同研究「東北アジアにおける民族の跨境生態史の研究」の一環として、第2回目のウズベキスタン調査が7月末より8月中旬までの約3週間にわたって行われた。本調査は1930年代のスターリンの民族政策により極東地域から中央アジアへ強制的に移住させられた朝鮮民族、すなわち「高麗人」の状況を様々な角度から調査・分析するものである。今回は昨年度の調査の成果をもとに、ウズベキスタンの高麗人社会に対するより重点的かつ詳細な調査を行った。調査地はウズベキスタンの首都タシケント、およびその郊外に位置する旧コルホーズのポリトオッジェル、およびブハラなどの地方都市である。特に高麗人が多数居住し、かつて高麗人のファン・マングム議長の指導下でソ連一の生産性を誇ったこともあるポリトオッジェルでは、ウズベキスタン高麗人文化センター協会の支援を得て一週間余りにわたる現地の高麗人家庭へのホームステイが実現した。

ポリトオッジェルの高麗人の一家庭

我々がウズベキスタンに滞在した時期はまさに夏真っ盛りの時期であり、昼間の気温は40度を越え、50度台を記録することも少なくない。日中の行動は体力の著しい消耗を伴うことになる。とはいえ限られた期間内での調査であり、また途中で長距離移動の必要もあったことから、こうした苛酷な条件を克服しつつ調査活動を進めねばならなかった。暑気あたりと日射病を避けるためには帽子着用は当然であり、脱水症状を避けるためには水分の補給も欠かせない。1人でミネラルウォーターの2リットルボトルを2本空けることもざらである。しかしながら今回は特に重点調査地であるポリトオッジェルにおいて、滞在先の好意により白昼は家で静養し早朝と夕方に調査を行うというスケジュールを取ることができた。また高麗人の家庭料理は脂っこいウズベク料理に食傷気味の我々にとっては干天の慈雨であった。（ちなみにこれは我々に限ったことではなく、集落中心部の食堂で高麗人コックの作る朝鮮式麺料理「ククシ」は現地のウズベク人やカザフ人にも人気があり、タシケントから食べに来る者もいる。いかにも中央アジア民族のいでたちをした彼らが数十人もそろってククシを食べている様子は、ちょっとしたカルチャーショックであった。）おかげで今回の調査では参加者の体調不良によるトラブルが回避できたのは幸いであった。



タシケント市内のメドレセ（イスラム神学校）前に停まっている韓国企業の現地生産車

ウズベキスタンの高麗人を取り巻く状況は90年代初めのソ連解体の後、急速に変化している。例えばウズベク語公用語化政策により、タシケント市内でもラテン文字表記のウズベク語による看板が増え、ウズベク語しか話せない若者が出現するなど、族際語であるロシア語の地位が急速に低下している。世代を重ねる中で母語を朝鮮語からロシア語に切り替えていった高麗人にとっては、言語生活面で新たな困難が生じつつある。一方、韓国企業の進出に伴い、タシケントなどではハングルで書かれた韓国企業の看板が散見され、また路上には韓国車が溢れている。この動きは同胞である高麗人の力に大きく負っている。また同時に、このことは高麗人の社会や文化意識にも様々な影響を与えている。多民族社会の中で民族的アイデンティティの維持を図りつつも他民族とりわけ最大民族であるウズベク人との共生を模索している高麗人の姿は、東北アジアの跨境民族である朝鮮民族の社会状況全体にも通ずるものがある。

本調査は本年度をもって一応終了し、調査の具体的成果については本年度末に報告書としてまとめられる予定である。

（上野稔弘）

編集後記

本号は表紙のカラーページを写真を主とした編集にしてみました。また、裏表紙のページにもカラー写真を多く使った記事で構成していきたいと考えています。

（鹿野秀一）

東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター 第16号 2003年2月10日発行
発行 東北大学東北アジア研究センター 編集 東北アジア研究センター ニューズレター編集委員会
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 東北大学東北アジア研究センター
PHONE/FAX 022-217-6010
http://www.cneas.tohoku.ac.jp/